

【主題】 個別最適な学び・協働的な学びを深める国語科の授業づくり

【副題】 ICTを活用した授業デザインの工夫を通して

【学校・団体名】 宮城県東松島市立矢本第二中学校

【役職名・氏名】 教諭 須田 貴子

1 はじめに

GIGAスクール構想の下に「高速大容量通信環境」「一人一台学習用端末」が整備され、授業にICTを活用することが容易になった。かつてはコンピュータールームに移動して調査活動を行ったり、グループごとにプレゼンテーションを作成して発表したりといった、特別な形でしか活用できなかった情報機器が、いつでもすぐに利用できる環境が整ったことは、たいへん喜ばしい大きな変革である。

本校でも令和3年度から教育活動のあらゆる場で、タブレット端末の活用を推進してきた。情報活用能力を育成する様々な実践的な取組が蓄積されるとともに、生徒たちもタブレットを用いた授業展開に慣れ、その成果や課題が浮かび上がっているところである。

文部科学省『教育の情報化に関する手引き(追補版)』(令和2年6月)では国語科におけるICTを活用した教育の充実のポイントが次のように場面ごとに整理されている。

- ① 情報を収集して整理する場面
- ② 情報を活用して自分の考えを形成する場面
- ③ 考えたことを表現・共有する場面
- ④ 学習の内容を蓄積したり参照したりする場面

本稿ではこれらのポイントを踏まえつつ「主体的・対話的で深い学び」の視点からICTを活用した授業実践の成果や課題を整理し「個別最適な学び」や「協働的な学び」を目指した国語科の授業づくりについて考えていきたい。

2 研究目標

ICTを活用して、個別最適な学び・協働的な学びを深める国語科の授業をデザインする。

3 研究内容

- (1) ICTが活用できる学習材や学習場面の吟味。
- (2) タブレットやアプリの操作方法の習得と活用。
- (3) 個別最適な学びを保障する学習方法の工夫。
- (4) 協働的な学びを深める学習課題の設定と提示方法の工夫。

以上4点を取り入れた実践を通し、個別最適な学び・協働的な学びを深める授業の在り方を追究する。

4 実践

- (1) 調べて分かったことを伝えよう

「食文化」のレポート(東京書籍)

- ① 学習の流れ

「食文化」について自分で調べたいテーマを決めて、分かった事実や考えたことをレポートの形式でまとめ、グループやクラスの中で伝え合う。

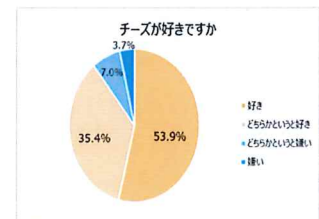
- ② ICTの活用

- ・教科書のレポート例をGoogleスライドにし、クラスルームから生徒にコピーを配布。項目の順番等が示されることで、調べること、記入することが分かりやすいテンプレートとなる。
- ・レポートをGoogleスライドで作成させることで、調査結果、考察等の構成を意識させる。
- ・テーマについて調査する場面でインターネットを活用し、情報の取捨選択を促す。
- ・調査結果の提示の順番やグラフ等の図表を効果的に配置し、調べて分かった事実の伝え方を工夫させる。

3 調査結果

- ③ チーズの★人気度★

右のグラフは、チーズがどのくらい人気かを表したグラフです。全体の二分の一が、チーズを好きなんです。それに対して、嫌いな人は、10.7%でした。チーズが、とても人気なことがわかりました。



(図1: 生徒が作成したレポートの一部)

- ③ 実践を通して

生徒たちはこちらの想定よりもはるかにタブレット操作に習熟しており、インターネットを利用して調査することなどは朝飯前であった。また、調べて分かったことをレポートにまとめる際、地図やグラフ等を効果的に配置し、分かりやすく伝えようと工夫する例も多く見られた。

一方で、調査結果から得られた情報の考察においては、分かったことの羅列に終始し、食文化の未来について、自分の考えを述べることでできた生徒は少なかった。テンプレートとしてレポートの形式は示すことができたが、考察の文章の書き方については、更に指導が必要であった。

(2) 根拠を明確にして書こう

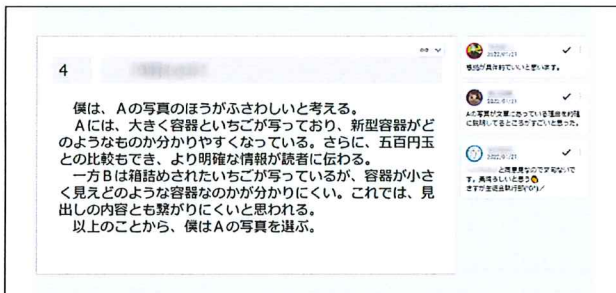
「写真」の意見文（東京書籍）

① 学習の流れ

根拠を明確に示すことの大切さを学び、新聞記事に写真を入れるならAとBのどちらの写真がよいか、という課題について、200字程度の意見文を書く。グループで読み合って感想を交換し、気付いたことを今後の表現に生かす。

② ICTの活用

- ・根拠を明確に示した意見文の構成を Google スライドにし、クラスルームから生徒にコピーを配布。テンプレートとして、個人の意見文を作成させる。
- ・一人ひとりの意見文をリンクさせた学級全体の Google スライドを準備。閲覧・コメント可の状態に共有。生徒が互いの意見文を読み合い、コメント機能で感想を記入する。
- ・Google フォームで学習を振り返り、活動を通して学んだこと、今後に生かしたいことをまとめさせる。



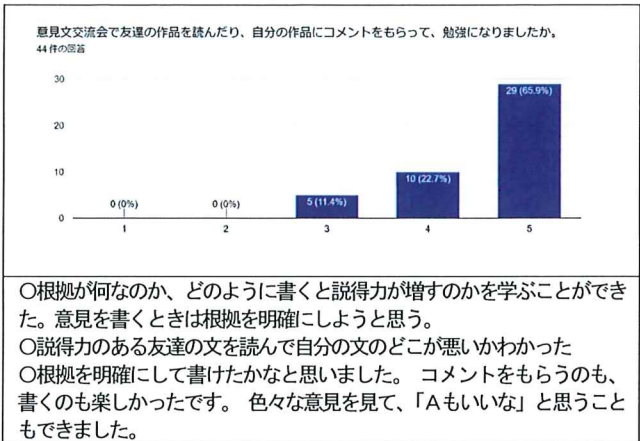
(図2：意見文に対する生徒のコメント例)

③ 実践を通して

最初に全員が共同編集できるスライドを準備して意見文を記入させようとしたところ、自分のページだけでなく、級友のページのレイアウトを変更したり、名前を変えたりといった失敗やいたずらが散見された。そこで、意見文の記入については個人のスライドをそれぞれが編集し、それをリンク貼り付けした全体のスライドを準備することで、共有と交流を図った。

コメント機能については、操作方法に慣れてしまえば次々と記入することができ、グループ内の生徒同士だけでなく、学級全体の交流も図ることができた。ま

た、明確な根拠が示された意見文を学級全体で共有し、今後の表現に生かすよう指導した。



(図3：Google フォームによる学習の振り返りから)

(3) 中心を明確にして話そう

「似ている言葉」スピーチ（東京書籍）

① 学習の流れ

意味や使われ方が似ている二つの言葉について調べたり話し合ったりして理解を深め、分かったことや考えたことをクラスの人に伝えるスピーチをする。

② ICTの活用

- ・スピーチの練習の際、Google ドキュメントの音声入力を利用し、音声言語を文字として記録することで、自身のスピーチを可視化させる。
- ・グループ内での発表をタブレットのカメラ機能で録画することで記録に残し、評価に生かす。
- ・スピーチの動画をクラスルームから提出させ、ループリックを活用して評価する。
- ・Google フォームで学習を振り返り、活動を通して学んだこと、今後に生かしたいことをまとめさせる。

③ 実践を通して

Google ドキュメントの音声入力機能は、マイク付きのヘッドセットを活用すれば、かなり正確に入力することができる。発音やイントネーションの違い、早口で不明瞭になってしまう言葉などが可視化できることにより、本来グループで行っていたスピーチ練習を個人で行い、なおかつ自身のスピーチの課題を自分で見つけることができるようになった。

スピーチの発表を動画で記録することについて、初めは恥ずかしがって抵抗を示していた生徒もいた。しかし、自身のスピーチを客観的に見ることで、目線や表情といった、態度の部分の課題に気づき、繰り返し練習したり、構成メモを修正したりして、よりよいスピーチにしようとする取り組み姿が見られた。また、クラ

ス全体での発表会を行わずとも、全員のスピーチをじっくり評価できるという点において、教員側にもメリットがあった。

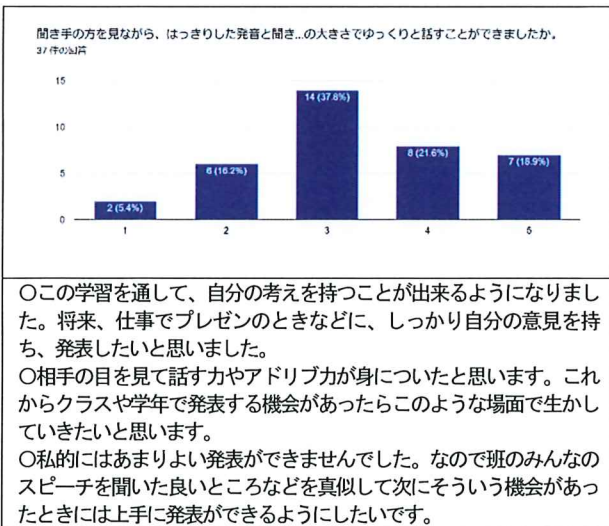
スピーチの評価に用いたルーブリックは、評価の観点と基準を示したもので、スピーチや文章などの評価を、明確に点数化できるツールである。生徒に返却する際に、コピーを添付できるため、生徒自身が課題を把握し、改善に生かすことができる。



(図4：生徒が撮影したスピーチの動画)



(図5：ルーブリックによる評価の例)



(図6：Google フォームによる学習の振り返りから)

(4) 週末課題

① 実践の概要

週末課題として、毎週末、文法事項や漢字・語句の知識について習熟を図る問題に取り組ませる。習熟度に応じたコメントとともに結果を返却することで復習を促し、学習内容の定着を図る。定期考査の前には回

答制限を解除し、繰り返し学習に活用させる。

② ICTの活用

- ・Google フォームで文法事項や漢字・語句の知識について習熟を図る問題を作り、テスト形式で出題する。
- ・NPO 法人による eboard や明治図書のなるほ動画等のリンクを示し、テストに挑戦する前に復習して知識の整理と学習内容の定着を図るよう促す。
- ・明治図書のマナビリアを活用して、ワークブックの繰り返し学習を推進する。

③ 実践を通して

金曜日の17時に週末課題を投稿し、月曜日の8時までに回答させるというスケジュールを固定することで、習慣化を図った。生徒から今週の週末課題は〇〇をやりたいとリクエストがあったり、もう一度取り組みたいので回答制限を解除してほしいとの訴えがあったり、意欲的に取り組む姿が見られた。また、保護者の方から、家族みんなで楽しんで週末課題に取り組んでいるといううれしい報告をいただいた。

毎週金曜日17時の出題投稿後、すぐに回答する意欲的な生徒がいる一方、なかなか取り組めない生徒も一定数存在した。回答期限を延長し、遅れての提出も認めることで、継続して取り組むよう促した。

(5) 国語科学習記録

① 実践の概要

国語の授業の準備や忘れ物の状況、授業態度の反省や活動を通して学んだことを記録に残す。

② ICTの活用

- ・Google フォームとスプレッドシートを連携して、授業と学習の様子を記録させる。

③ 実践を通して

Google フォームのコピーを個人に配布することができないため、生徒が自身のドライブにコピーを作成し、あらかじめ用意したスプレッドシートと連携させる作業が必要である。さらに、授業の際にスムーズに入力するために、フォームの回答ページをブックマークさせなければならない。全体の指導と画面表示のマニュアルだけでは、生徒が作業を完了することができず、改めて時間を設定することになってしまった。

一度設定してしまえば、授業の最後に入力する作業は簡便であり、短時間で学習の振り返りができる。毎時間、今日の学びを記入させることで、学習の足跡が残り、見直しをもって次回の授業に臨ませることができた。

5 研究の成果と課題

(1) 成果 —— ICT活用のメリットと可能性

① 課題の提示、および表現の手段としてICTを活用することは、生徒の意欲を喚起するうえで大変有効である。

タブレット端末を授業に用いるのはもはや特別なことではなくなったが、ノートを閉じてタブレットを開くとき、生徒たちは一様に目を輝かせている。文章を書くことが苦手、作文が嫌いという生徒であっても、タブレットを用いることにより、抵抗なく課題に向き合うことができ、自分の考えを入力することができる。

「書く」ことに苦手意識を持つ生徒にとって、大きなハードルになるのがノートや原稿用紙に鉛筆で「字」を書くことである。自分の考えをまとめることも難しいが、考えを表す言葉が見つからないことや、書きたい漢字が分からないことで、書くことそのものに時間がかかり、課題解決のために与えられた時間内に文章を完成できないことが多い。そういった生徒たちにとって、入力さえできれば漢字に変換してくれ、文章の校正まで行ってくれるアプリは大きな力となる。実際に、手書きではなかなか文章を書けない生徒が、最初に課題の入力を完了したことで、周囲の生徒に驚かれ称賛を浴びる場面があった。

② 個別最適な学びの充実を図るためにはICTの活用が不可欠なものとなる。

教室での講義型の一斉授業では、個々の生徒の到達度に応じた適切な指導を授業時間内に行うことは難しい。しかし、ICTを活用することで、到達度によって取り組む課題を変えたり、生徒自身が難易度に応じた教材を選択したりすることが容易になる。さらに、クラスルームの機能を活用することで、教師による支援を受けたり、級友のアドバイスを参考にしたり、それぞれの生徒が自分の課題解決に必要な手立てを講じることができる。

③ 協働的な学びを深めるための情報の共有と意見の交流を図るツールとして、ICTを活用することには大きな可能性がある。

今回の実践では情報の共有と意見の交流のためにGoogleスライドのコメント機能を活用したが、ドキュメントやスプレッドシートでもコメントのやり取りが可能であり、ジャムボード、フォーム、さらにサイトなど、無料で利用できるアプリのほとんどで共同編集が可能のため、アイデア次第で意見交流の場は無限

に広がる。しかも、その経緯が記録され、振り返ることができるのも、音声言語にはない大きなメリットである。グループごとの話し合いの様子を学級全体で共有することも、クラスや学年、学校や地域を超えて交流の輪を広げることもできるため、様々な場面での活用が期待できる。

(2) 課題 —— ICT活用のデメリットと留意点

① メディアリテラシーの指導を徹底することが急務である。

そもそも、授業でICTを活用するためには、情報機器やインターネットの操作活用能力が不可欠である。また、生徒たちは簡単にネットで検索すれば答えが見つかると考えがちであるため、情報モラルやメディアに対する自己コントロール力、情報をうのみにせず主体的批判的に受け取る力、そして、情報発信能力を養っていかなければならない。これは国語科の授業だけでなく、学校の教育活動全体を通して取り組むべき課題である。

② よりよい授業づくりのため、教師、生徒ともに、スキルアップが必要。

ICTは便利な道具である。それを使うことを目指すのではなく、授業のねらいを達成するために、どのような活用方法があるかを考えるべきである。そのためには、情報機器の操作はもちろん、様々なアプリの機能や操作について習熟を図ることが必要となる。文章を書くならワードかドキュメントと固定観念で捉えるのではなく、表現の形や交流の方法まで考えを広げることで、スライドやジャムボードを活用するアイデアが浮かぶこともある。たくさんアプリを実際に使い、教員同士で実践の交流を図ることで、活用の幅を広げていきたい。

6 おわりに

実践を通して得られたのは、個別最適な学び・協働的な学びを深める授業づくりのためには、今後、ICTの活用が不可欠なものになっていくであろうという確かな実感である。ただし、情報機器はあくまでもツールである。授業をする教師が明確なビジョンを持って臨まなければ、タブレット操作の習得を目標にするような本末転倒に陥ってしまう危険性もある。そのことを念頭におき、これからもよりよい授業づくりのために、ICTを積極的に活用していきたい。

〈参考文献〉

実践国語研究 368号 (2021年9月1日)